

特集：新型コロナ禍における
大学の対応（連載）

教育実習を終えて
新教員紹介 文大に着任するにあたって
講演会だより／文大だより／ぶんだい堂

新型コロナ禍における大学の対応(連載)

令和2年(2020年)2月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス(COVID-19)の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、3月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの(スペイン風邪では2年～3年)であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

新型コロナウイルス感染症等対策本部の 設立と初期活動の記録

副学長(学生・教育担当) 杉本光司



今回の新型コロナウイルス感染症対策に関する学報記事の記載にあたり、改めて考えることは、旧年度から新年度への切替と同時に、大学執行役員の変更が重なったことによる大きな混乱から出発したことが蘇ってくる。記録によると、前年度 令和2年3月24日の常任理事会において、初めて、新型コロナウイルス感染症に関する本学の授業等の対応について検討と対策本部設置についての協議が始まった。本来だと、この時期から、次期執行役員が会議に加わり対策を講ずるべきと考え、会議への参加申し入れしたもの、遂に年度内は認められなかった。

そこで、令和2年3月31日付文書において、次期学長及び副学長予定者として、4月8日に予定されていた第1回教授会の前、4月1日に臨時教授会を大学内で開催する旨のお願い文を教授会メンバーに送付させて頂

き、同時に Web 会議システム(Teams)を利用したオンライン参加も認めて開催することになった。そして、この日「新型コロナウイルス感染症等対策本部」を下記一覧のメンバーで設置し、まずは、教務部門と学生部門の活動(その後、情報部門新設)を始めた。

これ以後の対策本部の状況を、各部門における主な活動を中心に、前期授業が遠隔授業としてスタートした4月22日までの状況を書き留めてみた。

◎令和2年4月1日 第1回対策チーム(教務部門)会議

- 1) 東京等からの通勤・通学及び前期授業について
- 2) 経過観察期間中に係る学習目的の教室使用についての方針
- 3) 経過観察期間中に係る音楽研究棟使用についての方針

本 部 長	理事長
副 本 部 長	学長
本 部 員	副学長(学生・教育担当)、副学長(学術・研究担当)、学長補佐(教務担当)、保健センター長、事務局長、総務課長、経営企画課長、学生課長、総務課長補佐、経営企画課長補佐、学生課長補佐
対策チーム 教 務 部 門	【リーダー】学長補佐(教務担当) 【副リーダー】教務委員長 【部員】教務担当リーダー、教職担当リーダー、副学長(学生・教育担当)
対策チーム 学 生 部 門	【リーダー】保健センター長 【副リーダー】学生委員長 【部員】学生担当リーダー、保健センター担当リーダー、国際交流センター担当リーダー
対策チーム 情 報 部 門 (4/12 新設)	【リーダー】副学長(学生・教育担当) 【副リーダー】日向良和(共通教育センター准教授) 【部員】吉岡 卓(学校教育学科特任准教授)、教務担当リーダー、 情報センター担当リーダー、情報センター担当者

- ◎令和2年4月2日 第1回対策チーム(学生部門)会議
 - 1) 感染症予防対策のフローチャート作成
 - 2) 健康チェック表について
 - 3) 保護者及び学生からの相談について
- ◎令和2年4月7日 第2回対策チーム(教務部門)会議
 - 1) 前期授業の運用について
- ◎令和2年4月7日 第1回新型コロナウイルス感染症等対策本部会議
 - 1) 各対策チームからの報告及び協議
- ◎令和2年4月7日 第3回対策チーム(教務部門)会議
 - 1) 体育関係授業の取り扱い
- ◎令和2年4月8日 大学HPにて学長からのメッセージ掲載(藤田学長)
 - 東京等からの通学・通勤及び前期授業についての方針～7道府県に対する緊急事態宣言を受けて～
- ◎令和2年4月8日 Zoomによるオンライン授業体験講習会の開催(専任・特任教員対象)
- ◎令和2年4月9日 大学HPに副学長(杉本)からの通知を掲載
 - 都留文科大学学生及び保護者の皆様あて
 - ・オリエンテーションについて
 - ・TOEICテストのオンライン実施について
 - ・遠隔授業について
 - 5月6日までの学生の居所等についての考え方
- ◎令和2年4月9日 第2回対策チーム(学生部門)会議
 - 1) 定期健康診断の実施について
 - 2) 学生証の配布
 - 3) 学外からのクレーム対応について
- ◎令和2年4月11日 Zoomによるオンライン授業体験講習会の開催(専任・特任教員対象)
- ◎令和2年4月12日 教務担当により「学務ポータルStepの利用ガイド」の作成
- ◎令和2年4月12日・13日 Zoomによるオンライン授業体験講習会の開催(非常勤講師対象)
- ◎令和2年4月14日 第2回新型コロナウイルス感染症等対策本部会議
 - 1) 各対策チームからの報告及び協議
 - 2) オープンキャンパス、高校訪問について
 - 3) キャリア支援センターの対応について
 - 4) 学食の運用について
 - 5) グラウンドの使用について
 - 6) 入試について
- ◎令和2年4月16日 第3回対策チーム(学生部門)会議
 - 1) 新入生の健康診断の実施について
 - 2) 感染症予防の啓発活動について
 - 3) 風邪症状等体調不良の学生対応について
- ◎令和2年4月16日 第1回対策チーム(情報部門)会議
 - 1) 遠隔授業の際の講義方法について
 - 2) Web会議システムソフトの利用について
 - 3) シラバス変更について
- ◎令和2年4月17日 臨時新型コロナウイルス感染症等対策本部
 - 1) 緊急事態宣言後の大学の対応について

- ・授業について
- ・教職員の勤務体制について
- ◎令和2年4月20日 大学HPにて緊急事態宣言をうけての通知を掲載
 - ・大学の対応について
 - ・学内施設の立ち入りについて
- ◎令和2年4月20日 第4回対策チーム(教職担当)会議
 - 1) 対策組織チームの確認
 - 2) 遠隔授業の実施について
 - 3) 教科書の販売について
 - 4) 学内の利用について
- ◎令和2年4月21日 第3回新型コロナウイルス感染症等対策本部
 - 1) 各対策チームからの報告及び協議
 - 2) 遠隔授業の実施にむけて現状報告と教職員への周知について
- ◎令和2年4月21日 全ての教職員あてに副学長(杉本)より通知
 - ・遠隔授業の形態と実施方法について

この中で、遠隔授業を進めていくにあたり、次の3点を基本的な方針として示した。

- 1 他の授業との重複や混乱を避けるため、時間割表に掲げた曜日・時限での開講を基本としてください。
- 2 パソコン環境の無い学生でも、スマートフォンで授業を受けられるようご配慮ください。
- 3 課題とフィードバックの往還を中心とした資料配布型授業を基本とし、動画の使用は特に必要な場合に限定してください。(履修生全員の通信環境が整っていることの確認できる授業は、この限りではありません。)

- ◎令和2年4月22日 前期授業を遠隔授業でスタート

この3週間の時間の中でも、それぞれの部門においては、常に他大学、国内のみならず海外の状況や対策に関する情報収集を積極的に行い、学生や教職員が安心して学びに専念できるように努力してきた。

4月22日からの遠隔授業の開始にあたっては、先ずは5月6日までの期間設定でスタートし、全ての授業開始にあたっては、学務ポータル「Step」を利用した授業運営から始めることをお願いした。

この原稿を書いている11月18日現在、教務部門会議は30回、学生部門会議も30回、情報部門会議は19回、そして対策本部会議も30回と4月以来ほぼ毎週開催されている。

しかし、これで安堵することなく、次から次へと目前に示されるこれまで経験したことのない課題に対しての挑戦は更に続くこととなったが、この後も、常に最善の感染拡大防止策をとりながら、先ずは、実習・実験・演習系の科目からの対面授業も取り入れることとなり、その後も徐々にではあるが対面授業に切り替わる科目も増え、キャンパスにも学生の姿が増えはじめている。紅葉した葉を落とす風と共に聞こえてくる若者たちの元気な声が、厳しい現実から少しだけ離れさせてくれるような気がする。

都留文科大学のコロナ対応の経緯

3月	3月19日	卒業式中止
	3月26日	学長メッセージ【学生に向け 4/1 ～ 2 週間の経過観察期間として自宅待機を要請】を掲載
4月	4月1日	新型コロナウイルス感染症等対策本部設置
	4月3日	入学式中止
	4月5日 (～7日)	全学オリエンテーション中止
	4月8日	学長メッセージ【東京等からの通学・通勤及び前期授業についての方針】掲載 前期授業開始を延期
	4月16日	学長メッセージ【学生・保護者の皆様へ】を動画配信
	4月18日	健康診断延期（1 年生対象） 富士急行株式会社からマスク寄贈
	4月20日	緊急事態宣言を受けて、学生の大学施設への立ち入りを禁止 4/22～5/6 の遠隔授業のみ実施を決定
	4月22日	遠隔授業を開始（5/6 まで）し、PC 教室のみ使用制限を解除（申請制）
	4月28日	副学長（学生・教育担当）メッセージ【5/7 以降の授業実施方針】を掲載 （遠隔授業を 5 月末日までに延長）
5月	5月13日	NPO 法人ガイアから次亜塩素酸水寄贈
	5月14日	緊急事態宣言解除を受けて、感染予防対策の整備を進めたうえで学内施設の利用制限を順次解除していくこととした
	5月19日	「学びの継続」のための「学生支援緊急給付金」学生に申請方法等周知（学内メ切 6 月 10 日）
	5月20日	副学長（学生・教育担当）メッセージ【6 月以降の授業実施方針】を掲載 （6 月以降も前期については各科目で遠隔授業を続行することなどの方針を示し、遠隔授業受講のための教室利用を一部開始）
	5月20日	英文学科卒業生大城早紀様からマスク寄贈（500 枚）
	5月25日	学生食堂・コミュニケーションホール営業開始
	5月26日	都留市からマスク寄贈（学生一人あたり 1 箱 50 枚） 都留文科大学後援会から布マスク寄贈（学生一人あたり 2 枚）
6月	6月1日	中央コンピューターサービス株式会社からマスク寄贈
	6月4日	教務委員長より各教員へ向けメッセージ【前期の成績評価について】を掲載（定期試験を行わないこと、成績評価の方法を学生に向け丁寧に説明すること等）
	6月10日	有限会社宝観光バスからハンドジェル寄贈
	6月11日	新入生のサポートと在校生のアルバイト確保策として新入生サポーター制度開始
	6月15日	部・サークル活動再開に向け活動計画表の受付開始
	6月16日	公式ホームページにコロナ特設ページを開設（コロナに関する情報を集約）
	6月17日	演習、実技、実験などを伴う一部の科目について対面授業開始 学内施設の段階的な利用制限解除について掲載 事務局窓口対応を再開（電話・メールを併用）
	6月19日	「学びの継続」のための「学生支援緊急給付金」推薦者リストを学生支援機構へ提出 （第 1 次推薦 488 名）
	6月22日	【遠隔（オンライン）授業に関するアンケート（学生対象）】遠隔授業開始当初の状況調査 および分析結果＜ 5/7 ～ 5/18 までによせられた回答（2572 名、学生総数の 75%）＞ を掲載
7月	7月1日	バランスの取れた食事と規則正しい生活習慣を促すため、「在学生限定のお得な 100 円朝食」を再開
	7月19日	総合型選抜試験志願者対象のオンライン個別相談実施 （文学部－英文学科・国際教育学科）・（教養学部－学校教育学科）
	7月28日	新型コロナウイルス感染症等対策本部長（理事長）メッセージ『＜【都留文科大学】新型コロナウイルス感染症拡大防止のための活動指針＞策定について』を掲載 [活動レベル 2（制限－中）]

7月	7月30日	副学長（学生・教育担当）メッセージ【今後の授業実施計画について】を掲載（夏季集中講義の実施方針は遠隔授業を基本とし一部のみ対面授業とすること、後期授業の実施方針の発表を 9/10 頃に決定発表すること等）
	7月31日	「学びの継続」のための「学生支援緊急給付金」推薦者リストを学生支援機構へ提出（第2次推薦 332 名）
8月	8月8日（～9日）	夏季 WEB オープンキャンパス開催 オンライン個別相談・動画配信（教員による各学科説明と特別講義など）
	8月26日	「都留文科大学新型コロナウイルス感染症に伴う緊急援助奨学金（令和2年6月1日施行）」に伴い、学内選考の結果 27 名に 3 万円ずつ支給
	9月10日	副学長（学生・教育担当）メッセージ【後期授業の実施方針について】を掲載[活動レベル 2（制限一中）] ※実験・実習・実技を伴う科目などの対面授業を実施する
9月	9月14日	受験生に向けて「新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のための受験生への要請事項と本学の対応」を掲載
	9月18日	保健センターから対面授業実施に際し注意すべき内容【都留文科大学における新型コロナウイルス感染症対策のガイドライン（教員用・学生用）】を掲載
	9月23日	保健センターによる動画「新型コロナウイルス感染症についての正しい知識」配信開始
	9月25日	各教室にアルコール消毒薬・教員用消毒セットの設置・各棟入り口に非接触式体温計を設置
	9月25日（～26日）	秋季 WEB オープンキャンパス開催 オンライン個別相談 / 特別講義（教員による各学科説明と特別講義など）を Zoom で実施 / 360°カメラによるキャンパスツアー動画配信
10月	10月5日	認定 NPO 法人フードバンク山梨と連携協定を締結
	10月8日	副学長メッセージ【11 月以降の授業実施方針について】を掲載[活動レベル 2（制限一中）] ※講義科目についても回数を限定して（1～3 回程度）対面授業を可能とする
	10月10日	感染予防対策を講じて大学院 I 期入学試験実施
	10月10日（～11日）	感染予防対策を講じて総合型選抜試験 I 期（英文学科、国際教育学科、学校教育学科）を実施（国の指針に基づき、当初日程を 2 週間遅らせて実施） ※コロナの影響を考慮し出願条件と審査基準の見直しを図った
	10月15日	『遠隔授業に関する実態調査（教員・学生）』分析結果≪ 8 月 21 日～ 9 月 6 日までによせられた回答（教員：270 名、学生 1167 名）≫の集計を掲載
	10月17日	延期されていた健康診断（1 年生対象）を感染予防対策を講じて実施（受診率 89.3%）
	10月17日	「フードバンク山梨」と「パルシステム山梨」協賛で生活困窮学生に対し、食糧支援物資を配布（総数 39 名）
11月	11月22日	感染予防対策を講じて活動評価学校推薦型選抜（地域社会学科）試験、総合型選抜試験 II 期（学校教育学科）を実施
	11月29日	感染予防対策を講じて全国 16 箇所の試験会場で学校推薦型選抜試験を実施



10/5 認定NPO法人フードバンク山梨と連携協定を締結



在学生限定 100 円朝食

健康診断の様子





教育実習を終えて

初等教育学科3年 川尻 佳奈

9月の教育実習では、初めて教師という立場から教育現場に携わりました。私は1年生のクラスを担当しました。新型コロナウイルスの影響で子供たちも学校に登校できたのが遅かったので、子供たちも学校生活に慣れていない時期に教育実習を行う事にとっても不安を感じていました。加えて、今までの学生という立場とは全く違い、驚きや、とまどいもたくさんありました。しかし、初めて顔合わせをしたときから積極的に子供たちのほうから声をかけてくれたり、大学では学べない事が経験できたり、充実した教育実習生活を送る事ができました。教育実習で学んだ事は、これからの私にとって大切な土台になると思います。教育実習の最初の1週間は、いろいろな先生方の授業を見させていただきました。学年が違えば興味や反応も違ってきます。子供たちにあわせて教える方法を変えるなど、それぞれの先生方の工夫やクラスの掲示の仕方など見る事ができ、教師を目指すうえでとても勉強になりました。

2週目から、1日に1つ授業を受け持ち、行います。大学でも模擬授業などを経験してはいましたが、大学生が相手にいることと、実際子供を前にして行うことは別のことに感じ、1から学んでいるように感じました。一回一回の授業で反省するところはたくさんありましたが、子供たちが発問しやすいような言葉がけ・タイミング・

板書の仕方・授業の展開の仕方など、学ぶこともたくさんありました。また、子供たちを前にして、初めて気づくこともありました。特に発問については、子供たちの反応をみて、タイミングを考えて行わないと、うまく授業を展開していくことができません。改めて、子供たちのことを理解することの大切さを感じました。さらに、担任の先生の仕事はとても多く、だからこそ時間を大切にし、効率よくこなしていかなければいけないと思いました。

実習を通してみると、一日一日が新しい発見や勉強になることばかりで、書ききれないほど、本当にたくさんのことを学ぶことができました。

教育実習で子供たちと多くの時間を一緒に過ごしていく中で、“教師になりたい”という気持ちはいっそう強くなりました。また、教えることの楽しさも感じる事ができました。そして何より子供たちに元気をもらっている自分に気づきました。子供たちの力はすごいなと思います。この子供たちを大切に、子供たちの良い部分を引き出せる教師になりたいと思っています。

今から本格的な教員採用試験に向けての準備が始まります。大変なことも嫌になることも多いと思いますが、実習で学んだこと、子供たちと1ヶ月共に過ごして感じた気持ちを大切に頑張っていきたいと思っています。





教育実習を終えて

国文学科3年 塩澤久留美

私は、9月下旬から10月中旬まで母校である山梨県の中学校で教育実習をさせていただきました。まず、新型コロナウイルスの流行への対応もあり一層忙しい中で、教育実習生として受け入れていただけたことは、ありがたいことだと強く思います。このような状況下でいくつかの制約もありましたが、実際の教育現場では感染防止対策として、どのようなことをしているのか、どのような点について考え、対応をしていくのか、ということ学ぶことができたのは得難い経験になりました。

授業については、作成した教材用プリントを元に内容の理解を深め、最後にグループワークで、限りある資源を効率よく長期に渡って使うために私たちができることを話し合いました。授業担当の先生と打ち合わせを重ね、分かりやすく、かつ自分で考えて書き込める形を目指してプリントを作成しましたが、実際に生徒に考えてもらうと、自分では気付かなかった穴が見つかることもあり、プリント作成一つでもこんなに難しいのだと感じました。グループワークでは、最終的にグループごとの意見を発表する形式にしましたが、クラスによって意見が大きく違うことや、私が想定していなかったような意見がでたことから、生徒一人ひとりが違うのだということを改めて感じるとともに、そんな生徒たちと関わり、その成長を傍で支える教員のやりがいについても感じました。

教員は授業をするだけでなく、学校生活の中での生徒との関わりもあります。そして、生徒との関わりは、普段の会話の他に生徒指導も含まれています。なにか注意するときも、強い言い方をするだけでなく諭すなど、言い方・タイミングはいくつもあるということ、甘やかすことと寄り添うことは別物であり、自分の信念をもって関わっていかうとするなら、無理に厳しくあろうとする必要はない、自分なりの言い方をしていけば良いと担当の先生に指導していただいたことが強く印象に残っています。最初は「先生」として見られているのだから、注意するときは強い言い方

でしっかりとしないといけないのだ、と感じていました。またそれが上手くできていないことから、教員を目指しているのにこれでは駄目だと落ち込んでいました。しかし、この言葉を掛けていただいてから、少し心にゆとりでき、どうすれば生徒に分かってもらえるような言い方ができるだろうか、私が無理せずに伝えられる言い方はどういうものだろうか、と考えることに繋がっていききました。

教育実習で生徒との関わりや、先生方からのご指導等、大学の講義では得られない貴重な経験ができたと感じるとともに、自分に不足している能力・知識がたくさんあるということも痛感しました。残りの大学生活ではそれらを補い、自分の目指す教師像に少しでも近づけるように励んでいきたいと思います。





教育実習を終えて

英文学科4年 矢内 優穂

私は、9月上旬からの3週間、母校の高校で教育実習を行った。今年度の教育実習は、様々な面で新型コロナウイルスの影響を受けたものになったが、環境に恵まれ、非常に充実したもので、「教員になりたい」という思いが一層強まった。

私の教育実習中の目標の一つであり、一番大切にすることが「生徒との関わり」だった。しかし、実習初日から4日間が前期期末考査で、生徒と十分にコミュニケーションできない日々が続き、本格的に生徒と関わることは考査後の実習5日目からと、遅いスタートとなった。そのため、生徒との関係構築の第一歩として、全員の名前と顔をできるだけ早く覚えようとしたがなかなか難しく、更に全員がマスクを着用していたため、苦勞した。しかし、挨拶など些細な呼び掛けの時でも生徒の名前を呼ぶようにしたり、自己紹介カードに記入してもらった私への質問に対する答えをまとめたプリントを作って説明したり、自分からのアクションを大切に生徒と関わっていくことで、最終週には全員の名前と顔を覚えることができた。

授業に関しては、指導教諭の先生が自分なりの授業にチャレンジさせてくださったので、大学で学んだコミュニケーション的な授業展開と、母校の受験や定期考査を意識した授業展開とを組み合わせた授業を行った。生徒とインタラクションを取りながらの授業をするには自分の力量不足を感じ、毎回反省点も多かったが、私の予想を良い意味で上回る発言をする生徒が多く、授業をされていて私自身も発見の連続だった。中には、「英語を使われると分からない」と素直な意見を言ってくれた生徒もいて、その生徒のおかげで「様々なレベルの生徒がいる中でどのような授業を展開するのか」という今後の課題もはっきりと見えた。

実習最終日のSHR、ある男子生徒が花束を渡す役で私のもとへ来てくれた。その男子生徒はいつも私の話を怖いくらいに真剣に聞いてくれる生徒だったが、「実習を頑張る矢内先生を見て、今まで迷っていたけど、僕も教員になろうと決めました!」という言葉と共に花束を貰った時には、大変驚いた。「教育実習生」という生徒たちに近い年齢の一種のモデルとして機能したのだろうか、自分がそこまで生徒に影響を与えていたとは思わず、改めて、教員という職業の責任の重大さを認識すると共に、大学で学ぶだけでは経験できなかった、教員の「やりがい」の一端を経験できた気がしている。生徒からは、花束の他に色紙と、私の好物であるチーズケーキを貰い、それにもまた驚いた。私からは、生徒一人ひとりに短いメッセージを添えた手紙を渡し、教育実習が終了した。

教育実習は、本当に驚きと発見と学びの連続だった。来年の春から、高等学校教諭になれる予定だ。コロナで大変な中でも実習させてくださった母校の先生方と生徒たちに感謝をし、教育実習での経験や大学で得た学びを糧に、春からの教員生活に備えていきたい。





教育実習体験談

英文学科4年 堤 彩香

私は母校（高校）で英語科の実習生として、3週間の教育実習を行いました。今年度はコロナ感染予防対策の影響で日程の変更や、実習校と例年以上に細かな連絡を取るなど実習前からあわただしい日々が続きました。コロナ感染予防対策のため、授業でのペアワークや生徒とコミュニケーションをとる際に支障が出ないか不安でしたが、ペアワークの際には顔が向き合わないよう指示する、生徒と話するときにはマスクを着けて近づき過ぎないことを徹底するなど、しっかりと対策をしたうえで実習に臨むことができました。実習を受け入れてくださった実習校の校長先生をはじめとする先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

私は「授業内外で生徒と積極的に交流すること」を実習での大きな目標にしました。大学の教職課程の講義で、生徒との信頼関係は授業の雰囲気作りや学級経営に大きくかわるということを学びました。3週間という短い中で、生徒達の大切な授業を少しでもよくしようと、教材研究はもちろんのこと、生徒との関係づくりにも力を入れました。授業内では、発言を褒めることや反応することを徹底し、発言をした生徒に対してまずその場で褒め、授業後にもう一度「あの発言よかったね」と声をかけたりしました。また、授業内で「○○さんがさっき言ってくれたように」と生徒の発言を拾ってクラス全体に広げることを意識して行いました。授業外では、授業前後や放課後に積極的に話しかけに行ったり、生徒の部活動の様子を見学に行ったりして、英語の授業では見ることにできない、生徒の他の一面を多く見ることができました。個々の生徒の部活動を把握して、ある時、一人の生徒に「今日は部活あるの？」と話しかけると大会が控えていることなどたくさんのお話を話してくれました。このような、声掛けや生徒との会話から得た情報が生徒の様子を把握したり、授業中意見を求める際に、生徒を指名するきっかけ



けになったりしました。「授業内外で生徒と積極的に交流すること」で、授業の雰囲気は日に日によくなり、生徒も顔を上げて授業に集中してくれるようになりました。また、私自身も毎日、目標をもって取り組むことで、良い点や反省点を明確にすることができました。

実習期間中は、1年生から3年生までの商業科・情報科・国際科の授業を計5つ担当させていただきました。異なった学年・学科の授業を経験して、生徒やクラスの状況に合わせた授業作りの大切さを学びました。また、すべての授業を基本的に英語で行いましたが、生徒指示がうまく伝わらないことも多々ありました。英語科の先生方にアドバイスを頂いて、伝わりやすい話し方、指示の方法など毎日試行錯誤しながら改善をしました。現場の先生方からアドバイスをいただいたり、英語だけではなく他教科の授業見学をさせていただいて、他教科の授業から英語の授業にも生かせることがあると学びました。

教育実習を通して、教員として生徒の成長を支えたいという思いがより強くなりました。この経験は、今後の教員人生においてもかけがえのないものになると思います。来年度から、私は中学校の英語教員として働きます。教育実習で経験したことや反省点を振り返り、今後もより一層自己研鑽に励みたいと思います。



教育実習を終えて

社会学科（現代社会専攻）4年 梶浦 壮馬

今年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、予定していた時期が延期となり、実習期間も短くなりました。そのような状況の中でも私を教育実習生として受入れてくださった母校である実習校には本当に感謝しています。ありがとうございました。

実際に教育実習を終えて最も実感したことは、教材研究に終わりはないということです。まずはその教材について自分自身がしっかりと理解する。その上で、どのような資料を活用するのか、どのような発問を設けるのか、生徒がイメージしやすいようにどのような例え話をするのか…。考えなければいけないことは数々あって、そのどれも終わりが無いと感じました。

たくさんの時間考えて、できる限りの工夫をすることができれば、その授業は比較的生徒の反応も良く、スムーズに進んだと感じました。どれだけ妥協せずに教材研究を行ったのか、またどれだけ工夫して教材研究を行ったのかが、授業のクオリティに直結すると実感しました。また生徒にどのようなことを伝えたいのか、また生徒にどのようなことを考えてもらいたいのかということを軸に、発問の工夫や提示資料の選定を行うことも重要であると思いました。

なによりこれだけの教材研究を行えたのは、授業中に生徒一人ひとりから向けられる真剣で一生懸命なあの目に応えたいと思ったからです。この教育実習の授業で向けられた生徒一人ひとりの目を私は一生忘れないと思います。

また私が担当した現代社会という科目は、その名の通り変動する現代社会で起きている問題を取り上げることが多い科目です。指導教員の「日常の生活すべてが教材研究である」という言葉をより実習中に実感しました。教員という職業は、常に学び続けることがなによりも重要で教材研究には終わりがなく、授業も教材研究も進化していかなければならないと痛感しました。

そして生徒はよく先生を見ています。先生が暗い授業を展開していると生徒も良い雰囲気です。授業を受ける側が明るくはっきりとしゃべることで良い雰囲気を作り、なによりしっかりと生徒のことは見るということが大切であると実感しました。一見当たり前のように感じるのですが、実際に教壇に立って50分授業を行うと、意識をしないとできないことが多いです。こういった当たり前のことを大切に意識していくことも必要だと思いました。

この教育実習の経験は大変貴重なものとなりました。この経験を糧に残りの大学生活、又その先でまっている新生活も一生懸命頑張りたいと思います。





わたしの教育実習

社会科学科（環境・コミュニティ創造専攻）4年 戌亥アズアーン

まず新型コロナウイルスの影響による急激な社会変化に直面している状況の中で、信頼して受け入れてくださった職員の方、生徒及びご家族の方にこの場をもって感謝申し上げます。

10月5日から同月23日まで都留にある中学校にて3週間ほど第2学年のクラス担任及び社会科学科の授業を実習させていただいた。

わたしは大学へ教員免許の取得を目標に入学した。大学4年間では心理学・コミュニケーション方法や授業構成・教授法だけでなく、さらに世界地誌・日本史といった社会科科目等も専攻を越えた友人たちとともに互いに切磋琢磨し学んできた。

この実習をこれまでの学習内容を実践に移す機会と考え、参加するにあたって「生徒一人ひとりに向き合って授業をする」という目標を立てた。

いまの中学生の感性にあわせて会話できるだろうか。そんな気持ちを抱えたままわたしは実習初日を迎えた。初めの一週間はひたすら担当のクラスに付いて回り様々な教科の授業を見学させていただいた。この期間を通して生徒同士の関係性、クラスの雰囲気や生徒たちの授業での様子を中心に観察した。また先生方は、教科だけでなく生徒の学年や時間割によって授業の構成及び進め方を変化させていることに気が付いた。

実習5日目にもなると、生徒たちとの関係性を築くことができた。特に早朝練習している生徒たちが、遠くから名前を呼んで挨拶してくれた時は声の大きさにひやひやしつつもうれしかった。教室に入ると、わたしに興味を持ってくれた生徒たちが話しかけてくれたり、給食のときに質問してくれたりするなど、私がハーフであることを気にせずに馴染めるようになった。

実習2週間からは授業を担当した。うまく授業を進行させることが出来るかという不安があったが、すぐに一人で教壇に立つことに慣れた。しかし毎回授業した後に別の不安が付きまとった。

生徒たちにとって良い授業を行えたのか。発問のしかたは正しかったのか。

このように改善点を見つけては次の授業までに修正することを繰り返してこの不安を解消させていった。

研究授業は3週目の火曜日に行った。これまでの改善点を確認して様々な手法を使うことで生徒個人のやる気をみんなで引き出すことができることを心がけて授業をおこなった。

その結果、充実した授業を行うことができた一方で、生徒たちの関心を引くにはより簡素に要点をまとめる必要を感じ、そのあとの授業にて実践することができた。

普段しっかりしていないわたしが教育自習をやり遂げることが出来たのは、職員だけではなく学校全体の温かなまなざしのおかげであり、たとえば忙しい時であってもこの子たちが将来を担っていくという気持ちを忘れず過ごすことができた。

3週間という短い期間の中で、自分が生徒たちに教えたことよりも生徒たちと生活するなかで温かな人間関係への姿勢や素朴な人間性について学ぶことが多い実習であり、今後わたしの人生においてかけがえのない経験になった。





教育とは何か？

国際教育学科4年 野原 隆成

私は、ぐんま国際アカデミーの中部にて、教育実習を行った。この学校では、「国際バカロレアプログラム」(以下IB)のMYP(中等教育レベル)とDP(高校2-3年に相当)を導入しており、英語科を専攻していた私は、MYPの英語を教える機会を得ることができた。この機会を通して、授業経験を積めるだけでなく、IBについての理解を、実践を通して深めることができ、とても良い機会となった。私が担当した授業のテーマは「Quotations」で、最初にこのテーマを聞かされた時は、「中学生でこの内容をやるのか!」と少し驚いた。しかし、MYPを受けている生徒たちは、DPに向けて、数多くのレポートや論文を書くため、これらの内容について学ぶことは至って普通のことだということは、DPを受けていた私がとても理解していることを再認識した。参考文献の書き方や文章の引用の仕方について学ぶことはとても重要なことであるため、教師としての責任の重大さを実感できた。また、教科書がないため、授業を一から作る必要があった。初めて教壇に立つ私にとってはとても難しいことではしたが、それ以上にやりがいをととても感じる事ができた。この授業を作る上で、生徒に何を達成させたいのか、どの資料を使用すべきか、生徒に何を考えさせ、何を知識として与えるべきかなどについて考えることは、生徒だけでなく私自身の学びに繋がった。このように、生徒と教師が共に学び合うことで、お互いを尊重し合い、教師は生徒の立場になって授業作りに取り組めるのだと思う。今回の教育実習で私が重要視した点は、生徒に知識も与え、考えさせる機会も与えるということだ。こう考えたのも、日本は教育の方法を変える前に、もう一度自分たちのやってきた教育を見つめ直す必要があると感じたからだ。日本の教育にも良い点はたくさんあり、その全てを変える必要はないのだ。例えば、知識を与えることは悪いことではなく、生徒が物事を考える上で必要なプロセスである。ただ、現在の日本の教育に対する考え方はとてもバランスが悪い状況だ。今まで通り、知識を与えるだけの教育を推進していくのか、それとも、これからは生徒主体の教育を推進していくのかという二つ

の選択肢があった場合に、どちらか一つを選択してしまう傾向がある。しかし、ここで重要なことは、どちらかを選択することではなく、これまで行ってきた知識注入型の教育と生徒主体の教育をバランス良く取り入れられた授業形態を構築することではないだろうか?知識注入型の授業では、様々な問題に関する基本的な知識を得ることができ、そこで得た知識を使い自分の考えを生み出すことこそがこれからの教育に必要なプロセスではないだろうか。知識がなくても考えることはできるが、非常に狭い視野からしか物事を捉えることしかできない。考えるということは、幅広い視点から物事を捉え、それぞれの視点についての利点や欠点を検証した上で自分なりの答えを形成することだと考える。そのためには、様々な知識が必要となり、必然的に知識注入型の授業は必要になってくるのだ。

最後に私が今回の教育実習を通して感じた疑問の一つ挙げておきたい。実習先の学校でMYPを受けている生徒たちがとても疲れているように見えた。私は、その状況を不思議に感じた。なぜならば、常に考えられるということは、常に新しい発見をすることができ、それはとても楽しいものであると感じるからだ。私は、「なぜ疲れているのか」を生徒たちに直接聞いてみることにした。そうすると、多くの生徒がMYPになってからの「課題の多さ」と「テストの形式」に疲れを感じていることに気づかされた。MYPが始まったことをきっかけに、教育に対する明確な目標や評価基準が設定された。そのため、ある程度の縛りが発生したために、生徒が息苦しくなっているのではないかと思う。教師の立場からすれば、明確な目標や評価基準があることによって、生徒が何をすべきなのか、何を学ぶべきなのかが明確になり、学びやすい環境になったのかもしれないが、実際のところ生徒はどのように感じているのだろうか?私が尋ねた生徒の中には、「答えのない問題について考えるのが辛い」という生徒がいた。そう答えたのは1人の生徒であったが、多くの生徒が同じ悩みを抱えているかもしれない。なぜこういった生徒が生まれてしまうのだろうか?私が考える一つの理由としては、生徒の「とりあえずやっておこう」という気持ちだと思う。「とりあえずMYPという環境の中で学んでおけば、力がつくから」、「とりあえずやっておけば将来が保証されるから」という考えが生徒にあるからだと感じた。つまり、学びの意味や意図を捉えようとせず、ただ与えられたタスクをこなせばいいという日本式の考えが無意識的にも人間の脳に焼き付いてしまっているのだ。そこを変えていかなければ、つまりは教師の意識を変えていかなければ、そこにある教育を変えることはできない。教師は常にkey questionとして「なぜ学ぶのか?学びとはなにか?」を問い続けなければならない。そして、私が教師になった際にもこの問いは常に自分と生徒に問い続けていく。

皆さんは、「教育」を変えるためには何が必要だと感じますか?





教育実習を終えて

国際教育学科4年 大田原美和

9月中旬からの3週間、母校で教育実習をしてきました。今回、「自分は教員として何ができるのか実践のなかから学びたい」、「大変なこともあるだろうけれど、教員という仕事のやりがいや楽しさを見つけない」という目標を立て、実習に臨みました。毎日、たくさんのできごとや学びがありましたが、1週ごとに分けてお話ししたいと思います。

第1週目は、やっぱり学校は生徒がいてこそ、ということを実感しました。初日から、早く生徒と仲良くなりたいと思い、クラスの全員と少なくとも1日1回は話すという目標を立てていました。最初のうちは、私の方から声をかけることが多かったのですが、だんだんと慣れてくると、生徒の方から挨拶をしてくれたり、「先生、先生！」と声をかけてくれたりするようになり嬉しく思いました。また、生徒たちと接していると、絵を描くことやスポーツが好きな子、クラスを盛り上げてくれる子など本当に十人十色だなと気づきました。実際に生徒と接する毎日だからこそ、生徒指導や授業づくりがより具体的で、先生方の生徒との接し方を見ていると、大学の講義で耳にしたことのある手法などを用いていて、知識をより生きたものとして学べました。

第2週目からは、本格的に授業実習が始まりました。授業づくりの際には、指導教官の先生から「どのような目標を立て、それを達成するにはどうしたら良いか」「前後の授業の流れや、生徒の学習段階を把握する必要がある」など、たくさんのアドバイスをいただきました。これらは現場に出たからこそ実感でき、改善に繋がるものばかり



でとても勉強になりました。また実際に授業をした際には、想像していた反応と違う反応が生徒から返ってきて焦ったり、生徒の意見や考えに対して即興で反応したり、実際に生徒を目の前にして行うからこそ体験できたことが多くありました。うまくいかなかったこともたくさんありましたが、今は自分の実力を認めつつ、これからも様々な教育を自分でも学んでいながら成長していきたいと思っています。

最終週は、生徒からたくさんの心に残る言葉をもらいました。最終週の研究授業の前に、生徒から「最初の頃は、緊張してたみたいだけど、なんだか先生として、貫禄が出てきたね」と言われ、面白いな、照れくさいな、と思う反面、生徒も私のことをしっかり見ていたんだな、私も生徒と同じように少しずつ成長していたのかな、と嬉しく思いました。さらに最終日に生徒たちからもらったメッセージにも、「先生の授業、楽しかったです」「ぜひ、先生になってください」など、温かい言葉がたくさんあり、嬉しさと感謝の気持ちから、涙が溢れてきました。実習が終わった今でもそれらの言葉がとても残っていて、教員になってからも大変なことはあるだろうけれど、このような温かい気持ちも忘れずに励んでいきたいと強く思いました。

この教育実習を通して、当初の目標達成に加えて、たくさんのことを感じ、学ぶことができました。それらを活かし、残りの大学生活でも、教員になるための勉強により励んでいきたいです。





着任のご挨拶

学校教育学科 講師 邊見 信

2020年10月に学校教育学科に着任いたしました邊見信です。9月までは、埼玉県にある十文字学園女子大学で助手をしていました。専門は、戦中・戦後におけるメディアと子ども・青年の関係史です。映画やラジオの登場以降、メディアによる教育革新への期待は語られつづけ、一方で、子どもとメディアの関係をめぐる「不安」や「危機」論も広がりつづけています。一筋縄ではいかないメディアと子どもの関係を、歴史的な視点から捉え直そうとしています。

学部・大学院と日本教育史ゼミに所属していたため、各地の教育遺産を訪れることが趣味です。当時の学校建築や、机、ノートを見ると、ここで教育を受けた人がいたのだと、胸が熱くなります。いまは難しいことも多いからこそ、「いまここ」ではない時間・空間に思いを致し、あり得た別の教育の可能性を想像しつづけることの大切さを感じます。

学生みなさんと、ともに考え、ともに学んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



2017年夏 長野・旧制松本高等学校前で



2012年夏 茨城・旧上岡小学校の教室



世界文学セミナーに参加して

大学院 英語英米文学専攻 井上 明紀

2020年7月5日から31日にかけての4週間、英文学科が提携するハーバード大学のInstitute for World Literature (IWL) のセミナーに参加した。日本での提携校は東京大学と都留文科大学だけで、まずはこの素晴らしい機会を与えてくださった大学に感謝したい。

IWLでは二つの講義と、コロンビアムという研究会での発表を経験した。David Damrosch教授とMads Rosendahl Thomsen教授の講義に参加した。ハーバード大学でIWLの所長を務めるDamrosch教授は『世界文学とは何か?』などの著作を多数持つ世界文学の権威で、この講義で世界の文学を読み、重要な理論を知る

ことができたことはとても大きな学びとなった。『Literature and the World』などの著書があるThomsen教授の講義では様々な作品を実際に読み、多くの時間をかけて参加者が活発にディスカッションすることで、多様な視点で分析する経験を得た。

毎週金曜日は「社会学と世界文学」をテーマにした研究会に参加した。多岐にわたる研究テーマについての発表を聴き、質疑応答でも積極的にコミュニケーションを図った。私のプレゼンに対しても多様な質問をもらうことで自分の研究の方向性を広げることができた。

そして月曜日は講義の後に貴重

な講演を拝聴する機会にも恵まれた。Damrosch教授をはじめ、批評家のMarko Juvan氏、ノイシュタット国際文学賞受賞者のDubravka Ugrešić氏、そしてノーベル文学賞受賞のOrhan Pamuk氏の講演を聴くことができた。

講義は今回は全てオンラインで、日本時間では深夜に行われたため生活は大変ではあったが、この苦労以上に深い学びを得た1ヶ月となった。実際に交流することはできなかったものの、世界中の修士・博士課程の学生や大学教授らと交流することができ、多くの刺激を得た。この機会を生かし、今後もさらに自分の研究に励んでいきたい所存である。



2020年度英文学科英文学会共催後期講演会

新しい言語をつくる翻訳

開催：2020年11月11日（水）

講演者：多和田葉子氏
満谷マーガレット氏

2020年度英文学科英文学会共催後期講演会は、今年の11月に紫綬褒章を受章された作家の多和田葉子先生と、翻訳家の満谷マーガレット先生をお招きし「新しい言語をつくる翻訳」という題でワークショップをオンラインにて行いました。

今回のワークショップでは、英文学会生が事前に多和田先生の作品『地球にちりばめられて』を読んで、自分の気になった部分を英訳した上で意識したポイントを交えながら発表し、それらについて多和田先生と満谷先生からコメントを頂戴致しました。『地球にちりばめられて』は、自分の国が消滅してしまった主人公 Hiruko が、同じ母語を話す人を探す旅に出るお話であり、登場人物のセリフの訳し分けや、日本語での言葉遊びをどのように英訳するかが翻訳をする上で重要なポイントでした。

始めに多和田先生は『地球にちりばめられて』にまつわるお話もしてくださいました。三部作の一作目として書き始めたそうで、今年5月に出版されたばかりの二作目『星に仄めかされて』と共にタイトルに着目すると、『“ち”球に“ち”

りばめられて』と『“ほ”しに“ほ”のめかされて』というように、題名でも遊びがきいています。

主人公 Hiruko と言語学を研究する青年クヌートとの会話の場面の英訳については、満谷先生は Hiruko の喋り方のたどたどしさを表すため、Hiruko が日本人であると仮定すると、日本語の特徴として主語が抜けがちであることや、語順では動詞が最後にくることから、英訳でも動詞を会話の最後に持っていくことを提案され、語順を変えることによってどの登場人物の発言かを明確にする満谷先生の手腕に、参加者からは感嘆の声が上がりました。また、同じく Hiruko の「発音がとても柔らかい」というセリフを、発表者は “Its pronunciation is very soft” と訳していましたが、満谷先生は “soft” の部分を “mushy” と置き換えられ、瞬時に類語が出てくる様子、更にそこから “mushy” という言葉の意味について多和田先生からの補足もあり、お二人の語彙や知識の豊富さを垣間見ることが出来ました。

今回のワークショップは初めてのオンライン開催のため学会生一同不安と緊張

でいっぱいでしたが、ドイツのご自宅にいらっしゃる多和田先生がワークショップ中に郵便物の受け取りで姿を消されるなど、オンライン開催ならではの珍？事件もあり楽しく、刺激的な会となりました。また私たちも主人公 Hiruko にならって、紙芝居を実演し、「創作」にも加わりました。ワークショップを通して、翻訳をすることの難しさや、原作者の意図を残したままの翻訳が出来ることの素晴らしさを実感しました。またお二人の「言葉」やご自身の仕事に対する熱い想いが感じられ、私たち英文学会生を含め、参加者全員がとても貴重な体験が出来たのではないかと思います。

（英文学科 石崎万里奈）



多和田葉子（英文学科特任教授）

1982年早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。同年ドイツに渡り2006年までハンブルグ在住。ドイツの書籍取次会社で1987年まで働きながら、チューリッヒ大学博士課程修了。1992年に芥川賞を受賞した『犬婿入り』や2003年に谷崎潤一郎賞を受賞した『容疑者の夜行列車』を始め、ドイツ語での作家活動ではシャミッソー文

学賞、2016年にはクライスト賞を受賞。今回のワークショップの題材である『地球にちりばめられて』（2018）は三部作の一作目で、二作目の『星に仄めかされて』も2020年5月に刊行されたばかり。2020年11月には紫綬褒章を受章された。



満谷マーガレット

アメリカ、ペンシルバニア州ピッツバーグ出身。ウスター大学卒、東京大学大学院比較文学比較文化修士課程修了。椋山女学園短期大学部、東京工業大学、大妻女子大学、共立女子大学等で教える。多和田葉子、角田光代、大江健三郎などの作品を翻訳。訳書に『The Eighth Day』（角田

光代『八日目の蟬』、An Echo of Heaven（大江健三郎『人生の親戚』）などがある。多和田葉子氏の『献灯使』の翻訳 The Emissary はアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞（翻訳文学部門）を受賞した。



都留文科大学
比較文化学会講演会

2020年10月7日（水）

海外ルーツの人々の日常生活と 制度的人種差別

下地 ローレンス吉孝



2020年度比較文化学会主催オンライン講演会

海外ルーツの人々の日常生活と制度的人種差別

開催：2020年10月7日（水） 講演者：下地ローレンス吉孝氏

10月7日、「海外ルーツの人々の日常生活と制度的人種差別」と題した比較文化学会主催のオンライン講演会が行われた。講師には社会学を専門とする下地ローレンス吉孝さんが登壇され、学内外から約70名が参加した。

前半はアメリカの黒人差別を事例に制度的人種差別について話を伺った。「制度」とは学校や工場など個人と社会を媒介する社会組織全般を指す。下地さんによれば、制度的人種差別は白人警察官による黒人殺害事件といった直接的な暴力だけではなく、間接的に特定の人種集団が不利になる仕組みも

指す。例えば、アラバマ州バーミングハムでは黒人コミュニティにおける貧困や医療施設の欠如で毎年約500人の幼児が亡くなっている。一方、日本ではBlack Lives Matterを巡り、ネットを中心に「日本には人種差別が無い」という反応がある。アメリカの人種差別が見えるのは声を上げてきた人々の積み重ねがあるからだとして下地さんは指摘した。人種差別は個々の人生とは関係が無いと思いがちだが、その心が差別を引き起こすかもしれない。

後半は日本における海外ルーツの人々の日常生活と制度について

話を伺った。まず、2017年の法務省の調査によると、外国人であるために住居への入居を断られた人は40%、就職を断られた人は25%にもものぼる。たとえ日本国籍であっても学校、職場、街頭などで差別的扱いを受ける。例えば街頭では警察官に在留カードの提示を求められたり、学校でも「何人なの?」と言われ続けて心身への影響を受けるそうだ。下地さんは、これらは世界に共通し、人は必ず一つの人種に属すると考える「単一人種観」に基づく指摘する。今後は「ハーフ」や「LGBT」など具体的な対象に特化して支援や是正を行うのではなく、社会の中に浸透している問題の構造を解決することや差別禁止の法制度化が必要だと下地さんは述べた。

差別という言葉の意味を知っていてもその中身や海外ルーツの外見・名前を持つ人の生活は知ることが無かったため、非常に貴重な話を聞くことができた。

（比較文化学科 下田理世）



講師紹介

下地ローレンス吉孝

博士（社会学）。立命館大学所属の研究員。「人種編成論」の視点から、「混血」「ハーフ」「ダブル」「ミックス」に対する戦後日本社会の人種化について、歴史的側面と人々の日常生活から分析している。著書には『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』（青土社、2018）がある。海外ルーツの人々を対象にした情報サイト「HAFU TALK」を共同運営している。

第5回 日本国際バカロレア (IB) 教育学会 公開シンポジウム 報告

開催：2020年10月4日（日） 都留文科大学 Zoom 会場

さる10月4日(日)に、第5回日本国際バカロレア教育学会が都留文科大学 (Zoom 会場) にて開催されました。当初は、キャンパスで対面での実施を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染リスクを避け、すべてのスケジュールをオンラインに切り替えて実施しました。

当日は、全国から大学関係者、IB 認定校教員、大学・大学院生など IB 教育の研究者や実践者がオンライン上の分科会やラウンドテーブルに集い、様々な観点から議論が交わされました。中には、香港など海外からのアクセスもあり、オンラインならではのメリットを生かした大会となりました。ちなみに本学からは、国際教育学科の佐々木南実先生と同学科3年生の駒走聡俊さんが、それぞれ国際バカロレアに関する研究発表(※1)を行いました。

また、大会では「教員の育成・研修と国際バカロレア～グローバル人材を育てる教員のコンピテンシーとは?～」と題して公開シンポジウムが開かれましたが、司会・登壇者を含めて130人近い参加者がZoom会場に集いました(※2)。今回のシンポジウムでは、IB 教員の養成・育成・研修に焦点を当て、大学院におけるIB 教員養成、学部レベルでのグローバル教育人材の育成、教育現場における現職教員の研修・育成、などの観点から議論が交わされました。私も登壇者の一人として「グローバル教育人材の育成に向けて～可能性と課題～」と題して話題提供を行いました。質疑応答では研究者のみならず大学生・大学院生からも積極的な発言や質問があり、明日のIB 教育研究を担う新しい世代の活躍に頼もしさを感じました。また、大会終了後、懇親会を兼ねてインターネット上で開かれた情報交換会でも、大学生・大学院生が積極的に研究者やIB 認定校の教員たちとスクリーン越しに語り合う姿がみられ嬉しく思いました。

コロナ禍で一時は大会の開催があやぶまりましたが、大会参加者の皆様の協力と熱意により、盛会のうちに終了することができました。オンラインでの実施という初めての試みにも関わらず、大成功に終わりましたこと、今大会実行委員長として心より感謝申し上げます。ありがとうございました。
(国際教育学科 教授 原 和久)

※1 本学関係者の研究発表

- ・佐々木南実 先生 (国際教育学科 専任講師)
『「はじめまして IB」 - 4 年制大学 IB 教員養成コースにおける初年次教育としての国際バカロレアの受け止められ方』
- ・駒走聡俊さん (国際教育学科 3 年生)
「日本の一条校で国際バカロレアを終了した学生に対する大学の受け入れ体制と授業内容に関する国際比較調査研究」

※2 公開シンポジウム登壇者



原 和久
(都留文科大学
国際教育学科 教授)



前田紘平 先生
(昌平中学校・高等学校
教頭・IB コーディネーター)



赤羽寿夫 先生
(東京学芸大学
教職大学院 教授)



齋藤真実 先生
(聖ヨゼフ小学校 教諭・
PYP コーディネーター)

部活・サークル紹介 陸上競技部

陸上競技部 磯部晃太郎

関東学生陸上競技対校選手権大会 2 部走り幅跳び 優勝

こんにちは。都留文科大学陸上競技部の磯部です。

私の専門種目である走幅跳では、10月11日に行われました関東インカレで追い風参考記録ではありますが、ベストの記録を出して優勝することができました。実は、私は9月28日から10月9日までの2週間、愛知県で教育実習をしていました。その2週間、朝は早いし夜も遅い中で、なんとか毎日30分のトレーニングの時間を確保していました。「毎日たったの30分」という決められた時間の中で、関東インカレで勝つためのトレーニングを考えました。そうすると必然的に、トレーニングメニューが絞られてきて、自分にはなにが必要か、なにをすれば良いかが明確になるようになりました。30分と言う短い時間に対して集中をして、熱をこめるため、自然と質の良いトレーニングになったと思います。また、この期間で一番大切だと感じたのは、普段の練習についてです。時間を気にせずに、当たり前のように陸上競技ができることへの幸せと、感謝を感じました。正直最初は「大切な大会の直前まで教育実習か。」と感じていましたが、この、忙しい中でなんとか考えて取り組んだ2週間は、私を1人の陸上競技者として、また、1人の人間として成長させてくれました。関東インカレ優勝と言う結果よりも、このことを感じる事ができたことが一番の収穫だと思います。それでも私の陸上競技者としての記録はまだ未熟であり、今のままでは到底目指すところへはいけません。今年の冬季の練習で陸上競技に対してより良い取り組みをし、来年はさらなる飛躍を致しますので、今後とも応援よろしくお願いします。



部活・サークル紹介 バドミントン部

バドミントン部 出島 光紘

バドミントン山梨県シングルス選手権大会男子A級 優勝

こんにちは、学校教育学科1年の出島光紘です。私が所属しているバドミントン部は、現在男子12名女子6名で活動しています。日々の部活に熱心に取り組むのはもちろんですが、私は今大会に向けて、フリー形式の練習に多く取り組みました。私が出場した最も最近の試合は、去年の10月だということもあったので今大会は1年ぶりの大会でした。そのため、フリー形式の練習を多く取り入れることで、試合感を思い出して大会に臨めるようにしました。

大会当日は、久しぶりの試合ということもあり緊張していました。ですが、現在コロナウイルスによって大会が次々と中止されている中、こういった大会に出場できるということは大変ありがたいことなので、まずは自分自身が精一杯楽しみたいと思ったので、1番に考えてコートに立ちました。初戦こそ、自分の思うようなプレイができなかったですが、以降の試合は自分の力を発揮し、優勝することができました。今回は、個人戦での優勝でしたが、今後はチームとして優勝できるように、より一層練習に励んでいきたいと思っています。応援の程、よろしくお願いいたします。



第65回 桂川祭



第65回桂川祭は芸能人企画と花火の打ち上げを行いました。芸能人企画では、シンガーソングライターのオーイシマサヨシさんによるライブを学生限定で配信しました。ライブは、アーティストの人気楽曲の演奏だけでなく、都留文科大学の学生に向けた特別講義、事前に学生から募った質問に回答していただく質問コーナーを行いました。学生限定のライブ配信でしたが、一時は同時接続者数が400人を超えるという、例年のようなステージでのライブとは違った盛り上がりを見せました。

また、夜には花火を打ち上げました。新型コロナウイルス感染対策もあって、大々的な宣伝は行えませ

んでしたが、「当日は大学構外からも花火を見られた。とても綺麗だった。」という声をいただき実行委員会の一人として嬉しく思います。この花火が、都留文科大学学生にとって希望の光となっていれば幸いです。

第65回桂川祭は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、例年のように学生や地域の人を巻き込んで行う出店や企画は実施できませんでした。そのような状況でも協力していただいた皆様、また、企画を見てくださった皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。今年の桂川祭が皆様にとって思い出に残る一日となっていまして幸いです。本当にありがとうございました。



桂川祭を振り返って

桂川祭実行委員会委員長
池田直生



『結び』というテーマのもと、10月31日（土）に、第65回桂川祭を行いました。『結び』というテーマには、桂川祭が、学生同士だけではなく、地域の方とも結びつける場になってほしい、不安定な状態も団結して乗り越えていきたい、努力が実を結び素敵な桂川祭になってほしい、といった意味を込めました。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、一日だけの開催となりましたが、予想以上の反響があり嬉しく思います。

2020年度 夏季・秋季オープンキャンパス開催報告



今年度の夏季・秋季オープンキャンパスは、コロナウイルス感染予防のため、キャンパスでの開催を取りやめ、Web上・オンライン上での開催となりました。

夏季オープンキャンパスについては、7月18日（土）、大学ホームページ上に、学長メッセージ、大学概要説明、キャンパスライフ紹介、そのほか各学科説明及び模擬授業の録画動画を掲載した特別サイトを開設しました。そして、8月8日（土）9日（日）、オンライン通話ソフト Zoom を使用した Web 個別相談会を事前予約制で実施しました。教員 1 名と本学学生が組み、高校生一人あたり 30 分、両日で計 129 件の個別相談を受けました。国際教育学科と学校教育学科については、7月19日（土）にも総合型選抜受験希望者を対象に Web 個別相談を実施し、計 24 件の個別相談を受けました。

秋季オープンキャンパスについては、より多くの高校生にコミュニケーションをもって参加してもらおうと、9月26日（土）に各学科説明及び模擬授業を Zoom によるライブ配信で午前・午後を実施しました。また、本学学生によるキャンパスツアーを録画配信し

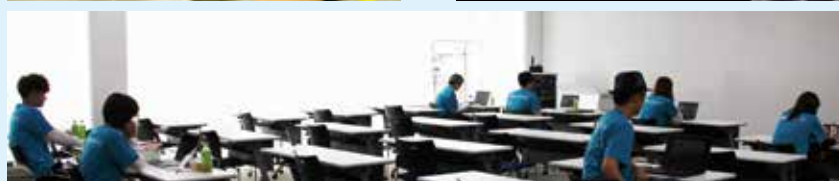
ました。9月27日（日）は、夏季と同様に全学科で Zoom を使用した Web 個別相談会を事前予約制で実施しました。学科説明・模擬授業のライブ配信には計 342 人の申込があり、Web 個別相談には計 84 人の参加がありました。

夏季においては、ソフトの操作に不慣れな高校生が何人か見られ、広報委員会や事務局で対応にあたりましたが、秋季は特段のトラブル等は見られませんでした。

参加した高校生へのアンケートからは、夏季・秋季を通じ、参加した高校生の 80% 以上が本学を第一志望としており、「動画や個別相談を通じて、本学のことを詳しく知ることができた」「雰囲気も明るく、学

生と教員の距離感が近いと感じた」「本学に絶対入学したいという思いがより一層強まった」といった声が寄せられ、オープンキャンパス及び本学に対して高い評価を行っていることがわかりました。コロナウイルス禍において、今後いかにより多くの高校生に本学に関心を持ってもらうか、また、どのようにアプローチをしていくか、課題を突きつけられていると感じます。

今年度は Web やオンラインによるオープンキャンパスの開催といった前代未聞の実施方法でしたが、準備・運営に快くご尽力をいただいた教職員、学生スタッフ、広報委員会の皆様、ありがとうございました。



前期修了者卒業式

9月23日（水）、本部棟3階大会議室において、令和2年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は13名の学部卒業者のうち、8名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、藤田英典学長より一人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



夏季集中講座

「現職教員教育講座」を開催

地域交流研究センターでは、7月28日（火）に1号館401教室で「現職教員教育講座」を開催しました。本講座は、県総合教育センターの中堅教諭等資質向上研修で選択講座に指定されており、県内の小中学校・高校・支援学校から延べ57名の先生方が受講されました。

当日は午前の部と午後の部の2講座が開講され、午前の部の『道徳性の涵養』は宮下 聡先生（教職支援

センター特任教授）、午後の部の『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』は堤 英俊先生（学校教育学科准教授）が担当されました。

実施にあたっては新型コロナウイルス感染予防のため、事前の健康調査や当日の検温、マスク着用や手洗い消毒の徹底、会場の換気や密を避けるための座席配置などの対策を行いました。



教員免許状更新講習

本学では、例年、教員免許状更新講習を開設しております。12年目を迎えた今年度は、6月20日から7月12日までの土曜日又は日曜日、計6日間にわたり13講習の開講を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、1講習を対面式からインターネットを活用した講習に実施形態等を変更し、その他の講習は中止としました。

インターネットを活用した講習として開講した講習は以下のとおりで、5名が受講しました。

領域	講習の名称	講師
【選択領域】	1人1台の端末環境を整備するGIGAスクール構想は国語科の授業をどう変えるか（国語分野）	野中 潤教授

中止した講習

領域	講習の名称	講師
【必修領域】	教育の最新事情	佐藤 隆教授 中川 佳子教授
【選択必修領域】	法令改正及び国の審議会の状況等	廣田 健教授
	学校におけるICT活用授業と情報モラル教育	相澤 崇准教授 日向 良和准教授 小河 智佳子特任准教授
	新学習指導要領に対応した外国語科及び外国語活動の授業づくり	上原 明子教授
【選択領域】	学級集団育成の理論とグループアプローチ（学級経営）	品田 笑子非常勤講師
	子どもたちの心と関わるために（教育相談）	正木 啓子非常勤講師
	感性を働かせてリズムに乗ろう！動いてみよう！（音楽体育）	（音楽分野）十川 菜穂准教授 （体育分野）水口 潔教授
	地層と化石の観察（理科教育）	鷹野 貴雄非常勤講師
	主体的な学び、対話的な学び、深い学びを具現化する算数授業（算数教育）	滝井 章特任教授
	「主体的、対話的で深い学び」と「国語教室」（国語教育）	春日 由香准教授
	社会科の新しい動向と教材作り（社会分野）	西尾 理教授
	新学習指導要領実施に向けた中学校・高校における英語の授業づくり（英語分野）	萩原 一郎特任教授

編集後記

日向良和

大学学報の編集後記も何回目か忘れてしまったが、新型コロナウイルスの感染が広がる中で、これまでの大学学報や大学広報と違う状況を感じている。2020年初頭より世界的な新型コロナウイルスの感染拡大で、日本でもクルーズ船での感染をテレビである意味他人事として眺めていた時から、緊急事態宣言、マスクが入手できない騒動を経て3密、GoToキャンペーンの年末まで来ている。この学報が出るとき、世界はどう変わっているかは予見が難しいが、ワクチンなどの開発が世界的に望まれている。(まあワクチン開発の後はその争奪戦による世界の国の間、人々での分断が進まないか懸念している)

大学はこの1年、3月の入試での対応や、卒業式、入学式の中止、4月当初から講義を開始することができず、全学での遠隔講義での前期、オンラインでのオープンキャンパス、対面講義も始まる後期と大きく通常と違う1年であった。そもそも、「遠隔講義」と対比される「対面講義」なる言葉は以前必要無かった。通常の講義だからである。この中で、どう変化できたのか、できなかったのか。また大学の学びとは何かを本質的に考えられたことは、大学教育においてある面で



スウェーデン、ウプサラ市立図書館の児童コーナー（スウェーデンの図書館も閉館という報道が先日あった）2018年8月24日筆者撮影

見直しとなることだったのではないかと感じている。

今年ももうすぐ終わり、2021年が始まる。まずセンター試験から衣替えした共通テストがあり、中期試験を経て、4月からまた新入生が入学してくる。2021年の講義はどうなるのか。まだ、予断を許さない状況が続いているし、就職活動への影響や、学生生活の変化などがどんな影響を学生たちにおよぼしているかなどの結果が出てくる年となるだろう。決して明るい年というだけではないだろうが、今年より深く大学教育ということを考えたことを、来年度以降に活かしていけるのではないかと期待している。

ぶんだい堂

イレズミと法
大阪タトゥー裁判から考える



小山 剛、新井 誠 編
山本芳美 (第1章)、他 執筆
2020年11月 発行
尚学社

◇山本芳美 比較文化学科 教授

カズオ・イシグロと日本
幽霊から戦争責任まで



田尻芳樹+秦邦生 (編)
レベッカ・L・ウォルコウィツ+荘中孝之+麻生えりか+加藤めぐみ+菅野素子+マイケル・サレイ+三村尚央+レベッカ・スーター (著)
2020年10月 発行
水声社

◇加藤めぐみ 英文学科 教授

国際バカロレア教育と教員養成
未来をつくる教師教育



東京学芸大学国際バカロレア教育研究会 編
赤羽寿夫、佐々木幸寿、原健二、藤野智子 編著
原和久 (第8章)、茂木秀昭 (第10章)、他 執筆
2020年6月 発行
学文社

◇原 和久 国際教育学科 教授
◇茂木秀昭 国際教育学科 教授

公立大学法人
都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL : <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第144号 2020年12月18日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大 (委員長)・日向良和 (副委員長)・田中昌弥 (担当副学長)・長瀬由美・加藤めぐみ・齊藤みどり・佐々木南実・水口 潔・藤江 毅 (情報センター担当)・山本香栄 (経営企画課長補佐)・雨宮容一 (企画広報担当)・関戸聡子 (企画広報担当)・天野麻由 (企画広報担当)